

辣腕<sup>らつわん</sup>  
上司の甘やかな  
恋愛<sup>こいわな</sup>

## 第一章

雲一つない澄み渡る青空と、燦々と照りつける太陽。

オフィスビル内はエアコンが効いて涼しいとはいえ、窓の外に広がる青空を眺めているだけで、出勤時の強い陽射しや蒸し暑さが甦ってくる。

今年は残暑が厳しいと予報されているので、これからも熱中症対策を講じなければならないだろう。

三十二歳の茅野藍子は、窓に向けていた視線を、秘書室主任の高市宗武に戻した。

お盆休み明けというもあり、今朝は連絡事項が多い。藍子は必要だと思われる内容を手帳に書き留めた。

藍子は、コンピューターシステム開発に重点を置くIT企業に勤めている。

会社自体はそれほど大きくない。しかしプログラマーを海外企業に外向させたり、大学の教育プロジェクトに協力したりして、人材育成に力を入れている。その結果があつてか、業界内では一定の評価を得ていた。

「秘書室からの連絡は以上になります」

藍子より三歳年上の高市の言葉で、秘書室の朝会が終わった。

ここで主任は自分の仕事に戻る。そしていつものように一般秘書業務を行う一課と、主に部長クラス以上の専属秘書を務める二課の秘書たちが一ヶ所に集まり、互いのスケジュールを確認し合う。しかし、今日は休み明け。

次第に脱線し、お盆休みに彼氏とどこに旅行したとか、海外旅行で素敵な出会いがあったとか、女子トークが始まった。

華やかな彼女たちは皆、恋愛に積極的だ。若い女性らしくはつらつとし、その姿は眩しいほど輝いている。そんな秘書たちの中で、藍子の存在は異色だった。

藍子の会社では、秘書はまず、一課で一般的な技能を身に付けるところからスタートする。そして四、五年経験を積んだ後、二課への異動願を出し、叶えば、部長以上の役職者の専属秘書となる。それ以後は、取引先の素敵な男性と出会って寿退社するのが定石だった。

だが秘書室に配属されてもう十年にもなるのに、藍子は未だ一課に留まっただけで、そのルートからは完全にはずれている。何故なら、寿退社を目指していないからだ。

秘書室に所属する藍子以外の女性秘書は皆、二十代。才色兼備な彼女たちがそのルートを歩みたくないなら、いくらでも応援しよう。

そもそも藍子は、結婚して家庭を築きたいという憧れもなければ、昇進して社会的地位を固めたという望みもなかった。それよりも一課に居続けて、縁の下の力持ち的な存在に徹したかった。どうしてそこまで異動を避け、先輩たちのあとに続きたくないのか。

その理由は一つ。

男性など、傍に近づきたくもなければ、個人的なかかわりを持ちたくもないからだ。

約十年前、藍子には恋人がいた。ところがその男性に、藍子は酷い言葉で罵られ、女性として不出来との烙印を押されたのだ。

彼曰く、藍子は色気がなく、男性の欲望をまったくくすぐらないらしい。そんな女には誰も見向きもしない、本気になる男などいないとまで言われた。

藍子にそう言った彼の隣には、裸身の美女がいた。ベッドに横たわり、藍子を鼻先で笑うような表情を浮かべている。

元カレの言葉に藍子の心はズタズタに引き裂かれて、同時にトラウマを植えつけられた。

女性としての魅力のない藍子が、男性に好かれるはずがない……と。

そうして藍子は、男性と距離を置き、自分からは絶対に近づかなくなった。

過去の辛い経験で恋愛する感情そのものをこじらしてしまったせいで、恋がどういうものだったのかもはや記憶にない。でも後輩たちが彼氏の話ではしゃぐ姿を見ているのは、とても楽しく、微笑ましく思っていた。

輪の外で後輩たちを見守っていると、高市が藍子の方へ近寄ってきた。

「茅野さん、ちょっといいか？」

「はい」

高市はおしゃべりに興じる課員たちにも「さあ、君たちも仕事に戻りなさい」と声をかけた。

「はい」

席に着く後輩たちの姿を目で追いながら、藍子は眼鏡のブリッジを指で押し上げる。

度の入っていない伊達眼鏡——それは、藍子が男性と距離を取るために身に着けたものだった。心をガードするには心許ないが、かけることで安心感を得られる方が大事だった。

また見た目的にも地味になる。これで仕事一辺倒の態度を取っていれば、誰も藍子には関心を持たないだろう。

もう二度と男性には傷つけられたくない。その一心で、使用している。今ではもう、藍子自身を守る鎧のようなものとなっていた。

藍子は眼鏡から手を離し、背の高い高市の隣に並んだ。

「どうされたんですか？ 何か、見落としてもありましたか？」

「いや、そうじゃない。ちょっとこっちに来てくれ」

促されて主任のデスクへ向かい、後輩たちに背を向ける形で立ち止まった。

「君に呼び出しがかかっている。総務部長からだ」

内緒話をするように、高市が上体を少し屈めた。

「わたしに、ですか？」

「ああ。システム研究部の部長も一緒だ」

突然の知らせに、藍子は目を見開いた。

総務部は、秘書室や総務室を、システム研究部はシステム関連の開発室や支援室をまとめている

部署だ。その部長が藍子と呼ぶとは、いったいどういうことだろう。

「会議室に来てほしいと連絡が入っている」

続いて時間を告げられ、藍子は腕時計に視線を落とした。あと十分ほどしかない。

「茅野さんの仕事は？ 何かあれば、こちらで対応するけど」

「大丈夫です。午前中はスケジュール管理と資料の整理のみで、急ぎの仕事は入っていません」

「そうか。それなら良かった。……じゃ、とりあえず、行っておいで」

藍子は高市に頷くと、一度デスクに戻った。

何故呼び出されるのか見当もつかないが、とりあえずシステム手帳を持ち、ホワイトボードに席を空ける旨を記載して、秘書室を出た。

会議室へ向かう藍子の目に、廊下の先で立ち話をする総務部長とシステム研究部長の姿が入った。

二人は眉間に皺を寄せて、意味深に頷き合っている。

その様子に藍子は不安を感じ、足が止まってしまった。

藍子がシステム手帳を掴む手に力を込めた時、総務の西田部長が藍子に気付いた。

「ああ、茅野さん」

「おはようございます。お待たせしてしまいましたでしょうか。申し訳ありません」

藍子は慌てて彼らのもとに駆け寄る。西田は伊達眼鏡を直す藍子を見て頷き、システム研究部の部長に向き直った。

「彼女が秘書室一課の茅野さんです。茅野さん、こちらはシステム研究部の阿川部長だ」

「茅野です。よろしく願いたします」

藍子が挨拶すると、西田が頷いた。

「では、詳細は中で話しましょう」

藍子は素早くドアを開けた。上司たちを室内に通したあと、コーヒーを頼むため内線電話の受話器を持つ。

「茅野さん、飲み物は結構だ。すぐに話を終わらせなければならぬからね」

西田に言われて、藍子は受話器を戻す。座るように促され、ソファに腰を下ろした。持参したシテム手帳を膝の上に置き、背筋を伸ばす。

「改めまして、彼女が秘書室一課の茅野藍子です。年齢は三十二歳。とても有能で、彼女ならどのような仕事でも冷静沈着に対処できると、秘書室長から推薦されています。秘書室内での評価が非常に高い、一課のベテランです。他の秘書たちも一目置く存在ですよ」

「それほど有能ならば、既に役員付きになってもおかしくないのでは？ 二課に異動の話は出ていないのか？」

「茅野さんから異動願は出されておりません。つまり、彼女の意思で一課にいるのかと。どうなんだい？」

話を振られて、藍子は一瞬固まってしまう。

何故藍子がこの場に呼ばれたのか、その理由がわからない。何をどう話せば上司たちの望む答えになるのだろうか。話の行き着く先を予想できず、簡単に口を開けなかった。

すると、西田が藍子を和ませるように微笑んだ。

「訊かれたことに答えるだけでいいよ。私たちは、茅野さんを知るために質問しているのだからね」

「はい……」

頷いたものの、身が竦む思いだった。けれど、これ以上部長たちの思惑を気にしても進まない。

藍子は再び姿勢を正し、強張る頬の緊張を無理に解いた。

「秘書室には、有能な後輩たちがいます。わたしはこれまで培った経験を生かし、いつでも彼女たちを助けられる存在でいられたらと思っています」

「つまり……茅野さんは誰かの専属になるのが嫌だという意味かい？」

「いいえ」

阿川の問いを藍子は即座に否定した。

「指示があれば従います。しかし、わたしには一人の人の専属秘書になりたいという強い願望はありません。一課の秘書として、皆のサポートに徹したいと望んでいます」

部長たちが、さっと顔を見合わせる。阿川が頷くと、西田が藍子に視線を戻した。二人の妙な態度が気になって仕方がないが、藍子は口を閉じて次の質問を待つ。

「なるほど。サポートに徹したいか。いい心掛けだ。指示があれば従うという答えも気に入ったよ。それはそうと、茅野さんの月末までの予定を教えてください。長期で休む予定などあるかね？ 仕事のスケジュールはどうなってる？」

「有休を取る予定はありません。また、今月末までの主な仕事ですが、基本的な資料整理やスケ

ジュール管理の他、二課の補佐となっています」

阿川は頷くと、内ポケットから取り出した用紙に目を走らせた。

「茅野さんは、料理教室に通っているのか？」

「はい。そうですが……」

藍子が料理教室に通っていることは、秘書室で雑談していた時に話したので、特に秘密ではない。だが、それが今、何の関係があるのだろう。

「英会話に不自由しない件は事前に秘書室長から聞いて知っていたが、料理までできるとは……うん、これは申し分ないとしか言いようがない」

困惑する藍子をよそに、阿川はすっきりした表情で顔を上げた。そして、西田に目配せをする。阿川にあとを任された西田が、藍子に向き直った。

「茅野さん。八月いっぱいまで持ち場を離れてほしい。会社には出勤しなくて結構だ」

「……えっ？」

これはまさか、左遷？

藍子の顔から一気に血の気が引いていく。

後輩たちのように、綺麗でもなければ可愛くもないが、地道に仕事に取り組んできたつもりだ。それなのに、この仕打ちはあんまりだ。

藍子はシステム手帳をきつく握り締めると、身を乗り出した。

「あの！」

「その代わり、とても重要な別の場所へ行って……うん？ 何だい？ 質問かな？」

二人の声が重なり、西田が言葉を止めた。藍子は失礼なことをしてしまったと焦るものの、彼が放った言葉が頭の中でぐるぐる回るのを止められない。

別の場所へって、いったい？

「茅野さん？ どうした？」

阿川が、藍子を心配げに見つめる。藍子は我に返り、頭を下げた。

「お話を遮さまたってしまい申し訳ありませんでした。どうぞ続けてください」

二人の顔を交互に見ると、今度は阿川が口を開いた。

「この先は私から伝えよう。ああ、どこまで話したかな……。そう、今の業務を脇に置いてでも、君に頼みたい重要な仕事がある。茅野さんの秘書としての取り組みを評価した上でのことだ。期間は八月いっぱい。これから概要を説明させてもらおう」

阿川が一枚の紙を藍子に渡した。

そこに書かれていたのは、ある男性の略歴だった。目が飛び出るほどの凄い内容に、藍子は自然と目を見開く。

大学在学中に国内外のセキュリティハッカーコンテストに出場し、表彰台を総ナメにしたグループのリーダー。今はこの会社の社員だが、アメリカの大企業に出向中と明記されていた。

出向先でも実力を発揮し、世界規模で事業展開する大企業のシステム制作に関わったようだ。

藍子は数々の輝かしい業績を見たあと、そっと顔を上げる。

業界内で有名人であるはずのその人物が何故、アメリカの大企業へ就職せず、日本の会社に入社したのか。そして、このようなものを見せて、一体上司たちは藍子に何を頼もうとしているのだろう。

「彼は黒瀬湊人。二十八歳と若い、システム開発室の誰よりもセキュリティプログラミングに通じている天才だ。さらにエンジニア……SEとしても優秀。その彼が帰国し、九月からここに出社する。八月の頭に帰国してるが、現在彼は、うちが協力している技術者育成プロジェクトに関連する仕事を自宅でやっていてね。会社ですればサポートもできるから出社しろと伝えたが、辞令は九月一日からと言って……。とはいえ、会社の業務を行っていることに変わりはない。そこで、彼のもとへ優秀な秘書を派遣することに決めた。私たちが白羽の矢を立てたのは、君だ」

「……わたし？」

二人が力強く頷く。

「黒瀬君は、我が社を代表するプログラマーだ。会社にとって、非常に重要な人材でもある。私たちは、彼が仕事に専念できる場を用意しなくてはならない。彼は秘書など不要と拒んでいるが、何と言われようとも、茅野さんに行ってもらい、雑用のすべてを任せたいと思ってる。私の言っている意味、わかるね？」

「はい」

藍子は素直に返事する。

ここへ来て、ようやく部長たちの目的がわかった。藍子の左遷話ではない。黒瀬という天才プロ

グラマーの自宅へ赴き、八月いっぱいまでそこで雑務をしろという命令だ。

「……いつからでしょうか？」

「今日このあと、すぐにだ」

「わかりました」

「ああ、こういう秘書がやっぱり望ましいね」

反論など一切せずに受け入れる藍子に、二人は満足げに口角を上げた。

阿川が、封筒を藍子の前に置く。

「黒瀬君の自宅住所や、君への指示、彼に渡してもらいたい書類が入っている。ここに書かれた内容は、社外秘のみならず、秘書室内でも共有不可だ。いいね？」

「はい」

藍子はずしりと重い封筒を膝の上に置く。顔を上げると、西田が真剣な表情で藍子を見つめていた。

「この件については、私から秘書室の小林室長に連絡を入れておく。……さて、他に何か訊きたいことはあるかい？」

「いいえ、ありません」

「よし、それならば早速出発してくれ。頼んだよ」

それを退出の合図に、藍子は立ち上がる。二人に頭を下げて会議室を出るまでは背筋を伸ばしていたが、一人になった途端下肢の力が抜けた。

廊下の壁に凭<sup>もた</sup>れて、早鐘を打つ心音を宥<sup>なだ</sup>める。何度も深呼吸を繰り返していると、徐々に落ちてきてきた。

「左遷<sup>させん</sup>じゃなくて良かった！」

思わず口をついて出た本音に、藍子は苦笑する。でもすぐに、ドア一枚隔<sup>へだ</sup>てた上司たちに意識が向いた。

何故<sup>なぜ</sup>、黒瀬という天才プログラマーのもとに藍子を送ると決めたのだろうか。優秀という意味でなら、藍子より英語が堪能で気が利く後輩がいる。

室長が藍子を推<sup>お</sup>した理由に小首を傾げそうになったその時、急に部長たちの笑い声が聞こえてきた。

反射的に竹<sup>たけ</sup>まいを正すが、上司たちが出てくる気配はない。

藍子が耳を澄<sup>す</sup>ませていると、彼らは廊下にまで聞こえる声量で話し始めた。

「正直な話、黒瀬君の自宅に秘書を送るのは本当に正しいのか、かなり悩んだよ。だが、茅野さんと会って安堵した。彼女なら任せられる。黒瀬君より年上なのもあって、何が起こつても簡単に引き下がりはいらないだろう」

「ええ、本当に。容姿端麗な秘書を送れば、黒瀬君の仕事の邪魔になったかもしれない。その点、茅野さんなら大丈夫でしょう。小林室長も彼女の秘書としての能力に太鼓判を押しましたし」

「茅野さんを見る限り、黒瀬君の足を引っ張る真似などしないのが伝わってくる。色恋沙汰で彼の才能を潰すわけにはいかなからな」

盗み聞きしていた藍子はうな垂れて、唇を強く引き結んだ。

そうだったんだ……。容姿端麗じゃないから……。それでわたしに回ってきたのね——と力ない笑みを零すが、そう思われても仕方ないのは、藍子自身が自覚していた。

ちらつと廊下の窓に視線をやり、そこに映る自分の姿を見つめる。

秘書という職種から、身なりには気を遣っている。膝丈の上品なスカート、袖ドレープが特徴的の柔らかなシフォンの半袖、そしてミドルヒール。同僚たちの中には、華やかな装<sup>よそお</sup>いをしている者も多いが、藍子は清楚<sup>せいそ</sup>な服装を心掛けていた。

セミロングの髪を緩<sup>ゆる</sup>やかに巻いて後ろで一つにまとめ、小さなスタッドピアスを付けている。

清潔感はあるし、決して女を捨てているわけではない。

ただ、藍子は男性の目を避けるために、オーバルフレームの伊達<sup>だて</sup>眼鏡をかけていた。かけていなくても、男性の興味は可愛くて素敵な同僚たちに向くので、藍子に声がかかることはない。それはわかっているが、それでも眼鏡をかけるのは、藍子自身が男性を拒否していると態度で示すためだった。

男性たちはそれを肌で感じるのか、異性としてではなく秘書として藍子に接する。

これこそ、藍子自身が望んだこと。女性としてではなく、秘書として信頼してもらえればいい。

藍子は、それを誇りにして生きていくだけだ。

会議室では、まだ部長たちが話している。今も黒瀬の話題が続いていたが、藍子にできるのは秘書として与えられた仕事を誠心誠意こなすこと。それだけだ。

藍子はその場を立ち去り、秘書室に戻った。

自分のデスク周りが片付いているのを確認してバッグを持ち、小林のもとへ向かった。それに気付いた彼が、手元の書類から顔を上げる。

「引き受けたのか？」

「はい」

「そうか。では、秘書室内の調整はこちらでする」

「ありがとうございます。今受け持っているスケジュール調整だけ、わたしが責任を持ちます。後ほどご連絡させていただきます。他の資料整理などはお願ひできますか？」

「わかった。それについては、私から高市主任に伝えておこう」

小林が頷く。そして、少し間を置いて言った。

「今回の業務は……特殊なこともあって、やりにくいだろう。しかし、これはとても大切な仕事だ。何があるかと極力堪えてほしい。あと、これを覚えておいてくれ。茅野さんが一課に戻ってくる日は九月一日だ」

小林の言っている意味を、即座に理解する。天才プログラマーに何を言われても、逃げ帰ってくるなどということだ。

「わかりました」

「よし！ 早く行つてこい。時間はないはずだ」

「失礼いたします」

そう答え、高市に簡単に挨拶してから、藍子は秘書室をあとにした。

オフィスビルの一階ロビーで、藍子はフロアに置かれたソファに座る。そして、阿川から渡された封筒の中身を取り出した。

黒瀬の連絡先の他、英語と数字が書かれた書類もたくさん入っている。そこには、赤字でいくつもの注釈が書き添えてあった。

藍子への指示書には、その書類と一緒にUSBメモリも渡すようにと明記されている。そして最後に、「何があるうとも、秘書に徹しろ」とあった。

当然そのつもりだ。にもかかわらず、ここまで何度も念を押されると、逆に不安になってくる。それでも、上司の期待に応えなければ……

藍子は封筒をバッグに入れると、意を決して立ち上がった。そして黒瀬の住所が書かれたメモを握り締め、彼の家へ向かうため一歩踏み出した。

—— 一時間後。

閑静な住宅街に建つ、高級そうな低層マンションの前に着いた。タワーマンションとは真逆のその建物は、個々の部屋が広いのが外からでもわかる。

「ここに住んでるの!？」

藍子は目を見開いて思わず立ち止まり、建物や周囲を見回す。

コンクリート打ちでありながら、ところどころにレンガ風のタイルが埋め込まれ、洒落た模様を

作る外観。広々とした明るいエントランス。そして、温もりを感じるウッド仕様の庭。それらすべてに目を奪われる。

黒瀬の年齢で、こんな高級そうな場所に住むのは可能なのだろうか。

一瞬そんな考えが脳裏に浮かぶが、先ほど見た黒瀬の略歴を思い出した。

もしかしたら、ここは日本に戻ってくる黒瀬のために会社が用意したものかもしれない。

部長たちの口ぶりから、黒瀬は会社にとってとても大切な人材だということがわかった。そんな彼の秘書に、藍子は選ばれたのだ。

失敗は決して許されない。心して仕事を全うしなければ……

再度自分に言い聞かせて、藍子は建物の中に入った。

洗練されたフロアを進み、セキュリティパネルの前に立つ。メモにある番号を打ち、呼び出しボタンを押した。

『……はい』

深いバリトンの声が響くなり、藍子の背筋に疼きが走った。

スピーカーから聞こえてきただけに、その声は耳孔を侵して心まで浸透した気がする。その不思議な感覚に、軀が震えて言葉に詰まった。

だが最初に躓いてはいけないと気持ちを立て直し、何度も生唾を呑み込んでカメラのレンズに視線を合わせる。

「黒瀬湊人さんですか？ 茅野と申します。システム研究部の阿川部長——」

『結構！』

スピーカーの音がブチッと切れた。

用件も言っていないのに、まさか阿川の名前を出ただけで門前払いされるとは。

これは、想像を絶する大変な仕事になるかもしれない。

ここから先、どういう行動を起こせばいいのだろうか。

思わず呻き声が零れる。

ついと目線を手元に落とした時、抱える封筒が視界に飛び込んだ。ハッとなり、再度呼び出しボタンを押す。

ところが、今度は応答もない。

だけど藍子には、ここで引き下がるわけにいかない事情がある。間を置かずボタンを連続で押した。

『……うるさい！』

「お忙しいところすみません。ですが……」

封筒を顔の前に掲げる。

「大切な書類を預かってきました。おそらくプログラミングに関係するものだと思います。あと、USBメモリも一緒に渡すようにと指示を受けてきました」

そこまで一気に伝えるが、返答がない。  
これでも無理？

一向に返事をもらえず、時間だけが過ぎていく。藍子が焦れてきた頃、スピーカーから黒瀬の深いため息が聞こえた。

『コンシエルジュに連絡を入れるから、彼女に渡して——』  
「いけません！」

藍子は封筒を下ろし、真顔でカメラを覗き込んだ。

「他人に大事なデータを渡せと言うんですか？」

『君も他人だろ？』

「違います！ わたしは会社の人間です。黒瀬さんに渡さなければならぬ大事な書類を、見知らぬ人に渡すことなどできません」

黒瀬が今、どういう表情を浮かべているのか想像がつかない。でも、藍子の声が届かなければ、この先秘書として彼の傍で仕事などできない。そんな事態に陥るのだけは、どうしても避けたかった。

でも、もし信用してもらえなかったら——そう思うだけで、どんどん最悪な状況が脳裏に浮かんでいく。次第に、封筒を持つ手が冷たくなっていった。

藍子がもう一度説明しようと試みた時、スピーカーから黒瀬の投げやりなため息が響き、そしてガラスドアが開いた。

ようやく信用してくれた？

藍子は自動ドアが閉まる前に、慌ててそこを通り抜けた。

黒瀬の部屋は、最上階の三階。エレベーターを降りると化粧鋼板の重厚な玄関ドアを横目に進み、目当ての部屋の前で立ち止まった。

失敗は許されない。どのような仕事を指示されても秘書として真面目に取り組むのが、今の藍子にできること。

藍子は黒瀬との対面に備えて、何度も深呼吸をした。気持ちを整え、インターフォンのボタンを押す。

数秒後、重たそうなドアが開いた。

藍子は上司の前に出る時と同じ姿勢で、現れた男性を伊達眼鏡のレンズ越しに見上げる。

「はじめ、まし——」

そこで思考が止まった。目を見開き、自分を凝視する黒瀬に思わず見入ってしまう。

黒瀬は俳優並に精悍な顔立ちをしていた。それに加えて、見事に引き締まった体軀。まるで一流ファッションモデルのように花がある。背も高く、立ち姿からは男の色気も漂っていた。

野性的に見えるショートウルフカットの髪型に、くつきりとした二重の双眸。真つすぐな鼻梁、そして形のいい薄い唇。どの部分を見ても目を惹かれる。

そんな黒瀬は、黒いカーゴパンツに、軀の線を露にする白いTシャツというラフな服装をしていた。恰好よく見せているわけではないのに、年上であるはずの秘書室の高市よりもはるかに男っぽく魅力的だ。

こんな男性は初めてだ。

黒瀬を目にするだけで、藍子の心がざわつき脈が飛び跳ねる。

「茅野さん……って言った？」

「は、はい」

吃る藍子に黒瀬が顔き、静かに片手を差し出す。一瞬握手を求められたのかとどきまぎしたが、そうではなかった。

黒瀬が示したのは、藍子の持つ封筒。預かってきたそれを早く渡せという意味だ。

とんでもない勘違いに顔が熱くなるが、何とか平静を装い、秘書として振る舞うべく考えをめぐらせる。

玄関先でこれを手渡したら、絶対にすぐにドアを閉められてしまう。そうなれば、もう二度と開けてもらえないだろう。

黒瀬と接してまだ数分しか経っていないが、藍子は見抜いていた。彼には頑なな部分があると。接し方に気を付けながら、冷たい目を向ける彼を見上げる。

「秘書室一課の茅野藍子です。本日から月末まで、黒瀬さんの秘書として働くために来ました」

「秘書」は必要ない。会社には何度もそう伝えてあるから、それを俺に渡して、とつと会社に戻ってくれる？」

そう言うとは彼は、苛立ちを目に宿して、藍子に覆いかぶさるように威嚇してきた。

でも、こうなるのは想定済み。藍子が怯まずにいと、黒瀬の眼光が鋭くなる。

「俺の言ってる意味、わかる？ いつ爪を立てようかと考えてるみたいだけど、俺の腕を引っ搔こ

うとしても無理だよ、子猫ちゃん」

子猫ちゃん!?

あまりに突拍子もない台詞に目をばちくりさせる藍子に、黒瀬が手を伸ばしてきた。子猫をあやす手つきで、藍子の顎をそつと撫で上げる。

十年ぶりに男性に触れられて、藍子の心臓が高鳴った。つい、軀がぶるつと震えてしまう。

藍子は顎の下に触れる黒瀬の指に促されて、彼を見上げた。空気を求めてかすかに唇を開けると、彼の目がついと口元に落ちる。

途端軀の中心を疼かせる熱が膨張して、藍子の吐息が甘くなった。

その反応が伝わったのか、黒瀬の面持ちが少し好色に緩む。しかし、藍子を見る目には、侮蔑に似た色がある。

黒瀬の浮かべる相反する表情に、藍子は混乱しそうになるが、そこであることに気付いた。

おそらく、これまでの黒瀬は、こうやっていとも簡単に女性を虜にしてきたのだろう。自分がモテるとわかっていて、相手を唆す行動をあえて取っている。しかしそうでありながら、簡単に彼の誘惑に落ちる女性に嫌悪を抱いているのだ。

黒瀬がそういう行動に出るのには、理由がある。

多分黒瀬は、誘惑に負けた藍子では仕事にならないと言い放って追い返そうとしているに違いない。

しかし、思い通りにはさせない。

藍子は、ゆっくり口角を上げた。

黒瀬の双眸に光が宿り、藍子の目を射貫く。

「言ったと思うけど。俺の裏をかこうとしても、それは無駄な足掻きになる。それがわからないから子猫ちゃんだと言ってるんだ。さあ、さつさとその封筒を渡して会社に戻ってくれないか」

黒瀬の声が、一層低くなる。

藍子はここが肝心だと気持ちを引き締めて、ドアに手を置いた。黒瀬の視線がそこに落ちたのを確認して、今だと目を細める。

「初めてです。こんなわたしを可愛い子猫にたとえてくれる人がいるなんて……」

「はあ？」

黒瀬が片眉を上げて、明らかに不機嫌な態度になった。藍子は意図的に、頬を緩める。

「わたしより四歳も年下の黒瀬くん、子猫扱いされるとはね」

「えっ？ 俺より四歳上？ ……君が!？」

黒瀬が驚愕したのを逃さずに、藍子はドアを押し開いた。

ドアを支える黒瀬が正氣に戻る前に、彼の腕の下を潜り抜ける。

「あっ、おい！」

黒瀬が藍子に腕を伸ばし、押し止めようとした。彼との距離の近さが恐い。それを必死に隠して彼を見上げた時、ドアの閉まる音が響いた。

外の音が遮断されて、藍子と黒瀬を静寂が包む。

男性と二人きり。しかも彼の腕は、藍子に触れそうなほどの距離にある。緊張がどんどん高まっていくが、ここで弱みを見せては仕事に差し支える。

最初が肝心だとばかりに、藍子は、挑みかかるようにして彼の目を見つめた。

「技術者育成プロジェクトの作業で、忙しいと伺っています。わたしは秘書なので、そちら方面の専門的な知識はありません。ですが、黒瀬くんの手を煩わせる雑用などを引き受けます。秘書であるわたしに何でも指示してください。……年上のわたしには仕事を頼みたくないかもしれませんが」

最後の一言で、黒瀬は開きかけた口を悔しそうに閉じた。

藍子を早々に追い返すつもりだったのに、今ではどう対処すればいいのか、答えが出ないようだ。

黒瀬はきつと、頭をフル回転させているだろう。

黒瀬の反応が鈍っている今を逃す手はない。チャンスだ！

仕事を続けるには先手が必要だと、藍子はすかさずヒールを脱いだ。そして、廊下の奥に見える磨りガラスのドアへ向かおうとする。しかし、足を一歩踏み出したところで黒瀬に腕を掴まれ、壁に押さえ付けられた。

黒瀬が藍子の両脚の間に片脚を入れてくる。下肢が触れ、彼の体温が衣服を通して伝わってくる。心臓が口から飛び出すのではないかと思うほど、ドキドキし始めた。

黒瀬に惹かれているわけではないのに、呼吸のリズムが崩れていく。彼の言動すべてに、心を揺さぶられる。

その事実混乱している藍子に、彼が上体を屈めて覆いかぶさってきた。

黒瀬の吐息が頬をかすめるだけで、下腹部の深奥がざわざわする。二度と感じたくないと思っていた不快なうねりに、藍子の軀が震える。

「……君の名前、何て言った？」

唐突に訊ねられて喉の奥が引き攣ったが、藍子は平静を装って黒瀬を見上げた。

「茅野藍子、三十二歳です。入社以来、秘書室に籍を置いています」

「ふん。藍子って本当に三十二歳？ もっと若いんじゃないの？」

黒瀬が藍子をからかうように、いきなり名前を呼び捨てにした。

不意に自分の名を口にされ、衝撃が軀の芯を駆け抜ける。思わず奥歯をぎゅっと噛み締めた。我が身の変化に戸惑うが、自分を律して彼に焦点を合わせる。思わず奥歯をぎゅっと噛み締めた。我が

「信じていただけじゃないのなら、免許証をお見せしましょうか？」

「いや、その必要はない」

藍子の言葉を黒瀬は一蹴し、今度は真面目な顔つきで藍子を威嚇してきた。

「もう一度言うよ。俺に秘書は必要ない」

黒瀬の有無を言わせない主張に、藍子の手の先が冷たくなっていく。エアコンが効いていて涼しいものがあるが、それとは別の緊張のせいだ。

「黒瀬さんの気持ち、よくわかりました。でも、ここでわたしを追い返しても、第二、第三の秘書が現れます。仕事に集中したいと思うのなら、わたしで手を打つのが一番賢明かと思います。あ

の……一度だけわたしにチャンスをいただけませんか？ この週末までの三日間、わたしを試してください」

藍子はもう賭けに出るしかなかった。

秘書は必要ないと告げる黒瀬の気持ちを尊重したい思いもあるが、そうすると上司の気分を害するだろう。このままでは、どっちつかずで終わってしまう。それは、藍子が望む結果ではない。

先ほどまで、少しでも自分が優位に立とうと黒瀬を煽っていたが、もうそれは止めよう。秘書として来た以上、仕事で認めてもらえるよう努力すべきだ。

その先には必ず突破口があると信じ、藍子は黒瀬に対峙する。

「わたしの存在が黒瀬さんの邪魔になるなら、素直に上司に報告します。お一人でも充分に対処できる方だと。それでも女性秘書の中では一番の年長者です。わたしの言葉なら、総務部長も信じてくれると思います」

「まじろっこしいことなどせず、今すぐ社に戻って言えばいいんじゃないか？ お互い、嫌な思いしなくていいと思うけど」

黒瀬の挑発的な言い分に怯みそうになるが、藍子は毅然とした態度を崩さず、顎を上げた。

「わたしにも秘書として誇りがあります。職種は違えど、仕事に向き合う姿勢は黒瀬さんと同じです。……どうか、その気持ちはわかってくれませんか？」

すると、黒瀬が藍子から軀を離れた。彼の温もりが消えて、少し心細くなる。

……うん？

突如湧いた気持ちに小首を傾げてしまいそうになった時、黒瀬が口を開いた。

「そんなに仕事がしたいなら、たっぷりさせてあげよう。但し、俺の気に障る真似をしたらすぐにでも追い出す。秘書失格という烙印を押してね。藍子はその覚悟で言っているんだろ？」

「当然です！」

「それなら、俺が君を秘書として認めたら、俺を黒瀬くんと呼ぶのを許してやるよ」

「……えっ？」

黒瀬はおかしそうにふつと口元を緩めたが、すぐに表情を引き締め、顎で奥を指した。

「藍子、こっちに来て」

親しげに名前を呼ばれて、藍子の頬が上気する。

“藍子”と呼ばないでと言いたいが、黒瀬はアメリカで働いていたのだ。仕事仲間をファーストネームで呼ぶのが彼にとっては普通なのかもしれない。

藍子は気持ちを切り替えて、黒瀬のあとに続いた。彼は廊下の突き当たりにあるドアを開け、藍子を促す。

「失礼します」

黒瀬の前を通って、室内に足を踏み入れる。

視界に、楽しく料理ができそうなアイランドキッチン、八人掛けの大きなダイニングテーブル、そしてリビングルームに置かれた大型液晶テレビと、柔らかそうなソファが飛び込んできた。

一人暮らしには勿体ないほど広々している。ただ、どこか生活感がない。たとえるなら、どこか

のショールームみたいだ。

藍子がこっそり室内を観察していると、黒瀬が隣に立った。

「ここ以外に、あと二部屋ある。一室はベッドルーム、もう一室はPCルームとして使ってる。他に部屋はないから、藍子はダイニングルームを仕事場として使ってくれ。但し、さっきの二部屋は立ち入りは禁止。そこに踏み入った時点で、即刻帰ってもらう。仕事の善し悪しは関係なくだ。いいね？」

黒瀬の有無を言わせない口調に、素直に頷く。すると彼は仕事の指示もせず、藍子をその場に置いて、ダイニングルームを出ていった。

藍子は、この状況に戸惑いを隠せなくなる。

もしかして黒瀬は、藍子に仕事を一切与えず、週末までこの状態で過ごせと暗に示しているのだろうか。

黒瀬を追いかけようかと思うが、彼の部屋には入るなと言われている。ここで彼を追えば、そのまま家から追い出されるかもしれない。

それだけは絶対に避けなければ……

藍子はダイニングの椅子にバッグを置き、軽く部屋を見て回った。何か手を加えるところはないかと探すが、ハウスキーパーがいるのかきちんと整理されている。埃も積もっていないかった。

次にキッチンに行き、大きな冷蔵庫を開ける。

「えっ？ 飲み物だけ？」

そこには、ビールとミネラルウォーターしか入っていなかった。冷凍庫も、市販のロックアイスが数袋入っているのみ。

今回の仕事は特殊だ。藍子は秘書として与えられた仕事だけをすればいいわけではない。担当する上司が仕事に集中できるよう、雑務を担うのも務めだ。そこには、食事面の管理も含まれている。数時間前、阿川が藍子が料理教室に通っているという話をあえてしたのも、そういう意図のもとだろう。

食材を買い込む必要があることを頭に入れて、さらに調理器具などを確認する。  
もう少ししたら買い物へ行こうと心に決めつつ、まずはダイニングテーブルにノートパソコンを置いた。

黒瀬がこれからどう動くのかが気になるが、今の藍子にできるのは、小林室長に連絡を入れ、受け持っているスケジュール管理をすることだ。

十数分後。担当していた分のスケジュール調整を終えて会社に情報を送信した時、ドアが乱暴に開かれた。

腕にたくさんのファイルを抱えた黒瀬を見て、藍子はすかさず立ち上がる。そんな藍子には視線すら向けず、彼はそれらをテーブルに無造作に置いた。

「これ、整理して。あと、会社に提出する書類の作成、電話の対応もよろしく。これらを約束の期日である三日後までに仕上げてほしい」

藍子はテーブルの上に広がるファイルの量に、生唾をぐくりと呑む。

どういう書類なのかわからない上に、ぱつと見ても三日で終わる仕事とは到底思えない。

それを理解しているのに、ここでの答えはイエス以外ない。

「……わかりました」

「仕事時間は九時から十七時まで。残業は許さない。あと、これを預けておく」

黒瀬が、家の鍵と指示書をファイルの横に置いた。代わりに、藍子を持ってきた封筒を掴む。

「いちいち俺に断らなくても、勝手に家に入ってきていいから。あと、休憩は勝手に取ってくれ」

黒瀬はこれ以上話す気はないと告げるように、藍子に背を向けた。彼が部屋を出ていく前にと、慌てて「黒瀬さん！」と呼びかける。

立ち止まって振り返る黒瀬の眼差しは、凍り付きそうなほど冷たい。

「何？」

「黒瀬さんと連絡が取りたい時はどうすればいいですか？」

黒瀬はアイランドキッチンを指す。そこにはコードレス型の子機が置いてあった。

「子機ボタン三番でP Cルームに繋がる。但し、俺は仕事中に邪魔されるのは好きじゃない」

続いて、リビングルームに置いてある複合機を目で示す。

「向こうにはファックスとコピーもある。好きに使っていいから、俺の手を煩わさないでほしい。いいね？」

「わかりました」

黒瀬はこれで話は終わりだとばかりに、ダイニングルームを出ていった。

残された藍子は、椅子に座り、黒瀬が置いていったファイルを開く。

まず目に入ったのは、山盛りの領収書。日付など考えずに、乱雑に束ねられていた。整理するのに時間こそかかりそうだが、これは慣れた作業なので問題なくこなせる。

難題なのは、会議や商談などに必要な文書の作成だ。そこにあるものをただ清書すればいいわけではない。添付されている情報を取捨選択してまとめる必要がある。

しかも、与えられた仕事とは別に、黒瀬の身の回りの環境も整えなければならない。

これはとても過酷な三日間になる……

エアコンが効いて涼しい室内で、藍子のこめかみに嫌な汗が流れた。

だが、この仕事をする決めたのは藍子だ。ここで躊躇ちゅうちよしている暇などない。

藍子は指の腹で汗を拭ぬぐうと立ち上がり、鍵と財布を掴んで部屋を飛び出した。

外へ出るなり、燦々さんさんと照りつける陽射しに目が眩くらむ。

肌にまとわりつく熱気に汗が噴き出して不快な気持ちになりつつ、マンションから数百メートル行った先にあるスーパへ急ぎ足で向かった。

三分の食材や調味料などを購入した藍子は、重たい袋を提さげて来た道を戻り始める。だが、徐々に真夏のこの暑さに息が上がってしまう。立ち止まって休みたいが、時間は待ってくれない。

藍子は玄関のドアを開けた。

頭の中でやるべきことを整理しつつヒールを脱いでいると、先ほど変わらない服装にアポロキャップをかぶった黒瀬が奥の廊下から現れた。

長財布を後ろポケットに入れながら顔を上げた黒瀬は、藍子を見るなりぎょつとし、苦々しげに口元を歪ゆがめた。

「ファイルを見て、逃げ帰ったと思っていたよ」

藍子は疲れを振り払い、黒瀬の方へ歩き出す。

「お出掛けですか？」

「ああ、昼飯に行ってくる。藍子も好きな時間に食べて。キッチンも好きに使っていいし」

黒瀬が藍子の横を通り過ぎる。藍子は一瞬、手を伸ばして彼の腕を掴もうとしてしまい、自分の行動に驚いた。

仕事とはいえ、自ら男性に触れようとするなんて……

藍子は自分の行動を打ち消すように軀からだの脇で握り拳を作り、奥歯を強く噛み締めた。

「……黒瀬さん、何のためにわたしがいるとお思いですか？」

黒瀬の足がびたりと止まり、ゆっくり振り返る。

「どういう意味？」

「買ってきましたよ」

藍子にはっこりして、手に持つ袋を見せた。

「お仕事に集中できるよう、黒瀬さんのお食事はわたしが用意させていただきます。すぐに準備しますね。どうぞ安心して仕事に専念してください」

「へえ、俺のためにそこまでしてくれるんだ。じゃあさ——」

黒瀬が藍子に近寄る。思わず後ろに下がった藍子を、彼は壁に手を突いて囲い込んだ。さらに上体を屈めて、これ見よがしに顔を近づけてくる。

「俺の性欲が高まって仕事ができないって言ったら、その相手もしてくれるってこと？」

黒瀬の台詞で、脳裏に彼に組み敷かれる自分の姿が自然と浮かんた。

藍子の服を脱がし、素肌を撫で上げて唇を落とす黒瀬。藍子はされるがまま受け入れ、彼の愛戯にベッドで身悶えてしまうだろう。

でも結ばれた直後、黒瀬は失望し、藍子を奈落へ落とす。それが容易に予想できた。

元カレが、藍子って、本当に男心をそその色気がないよな。男をその気にさせる術を知らない女とのセックスって、満たされるどころか疲れるだけだ」と嘲ったみたいに。

わかりきった結末が次々と浮かんて、藍子の顔から血の気が引いていった。

「……藍子？」

黒瀬の問いかけに、藍子は恐怖に満ちた目で彼を見上げる。

あれは過去の出来事であって、今起きたのではない。二度とそういうショックを受けないために、伊達眼鏡をかけて心を守っている。

大丈夫、冷静に対処すれば、この状況を脱することができる。

そもそも藍子は、男性の目を惹くような色気を感じさせるタイプではない。彼に興味のある素振りもしていない。

つまり、黒瀬がこんな性的な挑発をしてくるのは、藍子に関心を持っているからではなく、ただ

の嫌がらせ。秘書が逃げ帰るようにしているだけだ。

藍子は黒瀬の挑発から目を背けて、大きく深呼吸をした。心臓はまだ痛いほどの強さで打っていたが、何でもない振りをして彼を仰ぐ。

男性の軽口に過敏に反応したら負けだ。

藍子は秘書としてだけでなく、年上らしく振る舞うことを心掛けて表情を和らげた。

「その役割は、黒瀬さんの恋人にお任せしたいと思います」

「恋人？ 俺にいると思う？ 日本に戻ってきて、まだ一ヶ月も経っていないんだ。しかも、俺の時間は仕事に費やされている。その俺に女ができるはずない。……藍子は？ 男がいるのか？」

仕事申だというのに思わず藍子の軀に熱が籠もり始める。けれどもそれを感じさせないように、なるべく変わらない姿勢を心掛けた。

「わたしは仕事に生きているので……」

「仕事に、生きてる？」

黒瀬が怪訝な顔をした。詰め寄られる気配を感じて動転しそうになるが、何とか感情を押し殺す。

「黒瀬さんも仕事に集中していれば……他の欲はどこかへ吹き飛ぶんじゃないですか？」

それとも、仕事に専念したいと言っているのは嘘だと？ ——そんな目で黒瀬を見つめて、話はこれで終わりだと小さく会釈する。

藍子は黒瀬に背を向けて、リビングルームへ続くドアへ進んだ。取っ手を掴んだ瞬間、強い力で手首を握られた。前触れもなく触れられて、激しく動揺する。

「俺が仕事に集中していないって？ 挑発しているの？ ……わかったよ。答えが出るのは三日後だ。俺の性欲についても確認してもらおう」

黒瀬はそう言い捨てると、藍子から手を離れた。苛立たしげにアポロキャップを脱ぎ、奥の部屋に姿を消す。

ひとまず山を越せたと胸を撫で下ろし、藍子はリビングに入った。

購入してきた食材を片付けて、サンドウィッチ作りに取りかかる。手軽に食べられたらという気持ちもあるが、主たる目的は別にあつた。これで黒瀬の好みや体調を知ろうと考えたのだ。

オムレツのようにふんわりさせた玉子焼き、がつつり目のトンカツ、そしてポテトサラダを作り、パンに挟む。それぞれ味つけにも工夫をしているので、食べ終えた量から、黒瀬の好みだけでなく夏バテをしているのかもわかるだろう。

しばらくキッチンで動き回っていると、先ほどセットしたコーヒーのいい香りが漂ってきた。すべての準備が整ったのを確認して、藍子は子機で黒瀬を呼び出す。

「昼食ができました。こちらで食べますか？ そちらにお持ちしましょうか？」

『俺が行く』

そう言ったあと通話が切れる。藍子がコーヒーカップをトレイに置いたところで、黒瀬が現れた。「仕事しながら食べられる方がいいと思い、サンドウィッチにしました。コーヒーメーカーが食器棚にあつたので使わせてもらいましたが飲めますか？ 他の飲み物も用意できますが」

「コーヒーでいい。あと、砂糖とミルクはいらない」

藍子は頷くとトレイから不要なものを除き、代わりにウエットティッシュを横に置いた。

「コーヒーはたっぷり作りましたので、呼んでくれればおかわりを持っていきます」

「……わかった」

黒瀬はトレイを持つと、さっさと出ていった。

「さてと！」

藍子もダイニングテーブルに移動して、黒瀬に作ったのと同じサンドウィッチを急いで食べた。食事を終えたら、いよいよ仕事だ。まず、領収書の仕分けを始める。続いて整理されていない書類を分類していくが、それが困難だった。わざとぐちゃぐちゃにして、藍子に時間をかけさせているのではないかと思えない。だが、文句を言っても仕方がない。

藍子が集中して作業を進めている間に、黒瀬は二度ほどダイニングルームに入ってきた。そして自らコーヒーを注ぐ。

カップを手にした黒瀬は、藍子の背後にしばらく立ち止まった。まるで、藍子を監視するかのような態度を取られて気が気なくなる。彼に見つめられるだけで効率が悪くなり、持っている書類が小刻みに震えた。

黒瀬もそれに気付いているはずなのに、藍子に声をかけることなく静かに仕事部屋に戻っていく。黒瀬の無言の振る舞いに、藍子の神経はかなりすり減っていた。でもここで逃げては、何しに來たのかわからなくなる。藍子は自分を奮い立たせて、仕事に集中した。

そして、十六時を回った頃。

調子がいいとは言いがたいが、藍子は仕事の手を止めた。テーブルに広げた書類をひとまとめにして、急いでキッチンに立つ。

シンクには、黒瀬の使った食器があった。

藍子特製の味つけとして、玉子サンドにはサルサソースを、ポテトサラダにはらつきよう酢を隠し味として入れていた。そこそこ量もあったはずだが、彼は完食している。

黒瀬の体調は良好、夏バテもなし、そして好き嫌いもあまりなさそうだ。

「これなら、何でも食べてくれるかも……」

藍子は鶏モモ肉を使って、黒瀬の夕食を作り始めた。キッチンに食欲をそそる甘辛い香りが充満していく。付け合わせの野菜なども準備し、冷蔵庫に入れる。仕上げに、メモ用紙に夕食の説明を書き添えた。

時計を確認すると、もう十七時目前に迫っていた。

時間までに退出しなければ、黒瀬に秘書失格の烙印を押されてしまう。

挨拶して出ようかと思ったが、黒瀬はそれを望んでいないだろう。邪魔するなどと告げて鍵を渡しているのが、その証拠だ。

藍子は最後に部屋全体を確認して、マンションを出た。帰宅途中にカフェへ寄り、主任に仕事の報告メールを出す。そこでやっと、ひと息吐くことができた。

一日目は、渡されたファイルを確認して仕分けするだけで終わってしまった。残りはあと二日しかない。

明日は朝一番で会社に寄って必要な資料をコピーし、黒瀬のマンションへ向かおう。

「疲れた……って言ったらダメだけど、今日は本当に辛かった」

藍子は伊達眼鏡を外すと目頭を手で揉んだ。それから、脱力してテーブルに突っ伏す。

周囲の目があるが、構ってなどいられない。頭の中は、すっかり黒瀬のことで占められていた。

藍子は、これまでも気難しい上司と仕事した経験が多々ある。そこには無理難題も多かったが、可能な限り努力し、誠実に対応してきた。そのため、彼らとはそれ相応の信頼関係を築けるまでになっていた。

黒瀬は、藍子の対応を素直に受け入れてくれない。それだけでなく、彼は仕事以外の話や意味深な言動で、藍子のリズムを崩そうとしてくる。

仕事以外の話に逸れた時は、本当にどうにかなりそうだった。

現在恋人はいないようだが、黒瀬の男らしい相貌から判断すると、付き合う女性はモデルタイプの綺麗な人ばかりだと考えられる。本来なら藍子など歯牙にも掛けないだろうに、藍子に恋人の有無を訊ねるなど、一体どういう了見なのか。

いや、あの行為には深い意味はないのだから、引つ掛かってはいけない。黒瀬は藍子に嫌がらせをして、追い出そうとしているだけ……

藍子は深いため息を吐いたのち、自宅に帰った。

それからの二日間、藍子は仕事に忙殺された。

二日目は、一日目と同じタイムスケジュールを基本にしつつ、文書作成に勤しんだ。彼の体調を考慮した食事を用意するのも怠らない。

そして三日目にして、やっと調子が上がってきた。でも、波に乗ってきたと思ったら、もう最終日。あと数時間しか残っていない。

藍子は会社でコピーしてきた資料と黒瀬に渡された文書を見比べつつ、書類作成に励む。

結果、この三日で、彼が様々な案件にかかわっているということがわかった。

渡されたその文書の項目は多岐にわたっており、どの書類にも、最終確認者として黒瀬の名があった。

それらをまとめることは藍子にとつてかなりのプレッシャーだが、これまでの知識と直感を信じて、打ち込むスピードを上げていく。

「あと、もうちょっとだけ……」

そろそろ昼食の用意を始める頃合いだが、藍子は手を止めずキーボードに指を走らせた。

ページを捲ろうと指を離れた拍子に、黒瀬の家の電話が鳴り響いた。ノートパソコンの横に置いていた子機を掴む。

「黒瀬です」

『あつ、茅野さんですよ？ 連日すみません。昨日もお電話した小田原です。あの黒瀬……さんはいますか？』

「はい、少々お待ちください」

保留にして黒瀬に連絡しようとした時、リビングルームのドアが開いて彼が現れた。

「黒瀬さん、小田原さんからお電話です」

「ああ」

仕事部屋に戻るかと思いきや、黒瀬は藍子に手を差し出した。藍子は子機を渡して、代わりに彼が持つ空のマグカップを受け取る。

「董？ ……昨日の今日で連絡って、そんなに俺が信じられない？」

初めて耳にする、黒瀬の穏やかな口調。しかも彼は嬉しそうに笑い声を上げた。

瞬間、藍子の胸の奥にぎゅっと締め付けられるような痛みが走る。

何、これ……

忘れていた何かが藍子を雁字搦めにする。

藍子は不可解な感覚から逃れるために黒瀬に背を向け、マグカップを洗ってコーヒを淹れた。

振り返ると、黒瀬はダイニングテーブルの椅子に座って電話をしていた。

「何時に行けばいい？ ……わかった。行くよ」

藍子は黒瀬に近づき、彼の前にマグカップを置く。彼が頷くのを確認して、キッチンへ向かった。黒瀬がそこに座って電話をしていたら、仕事に集中できない。ここで切り上げて、昼食の準備をするのが一番いい判断だ。

藍子は冷蔵庫の扉を開けて、昼食に必要な材料を取り出した。

がつつり系でも難なく食べる黒瀬のために、牛肉の梅肉和えスタミナ丼を作る。

しばらくして黒瀬は通話を切ったが、椅子を立つ気配はない。彼はキッチンにいる藍子を見ながら、コーヒーを飲んでいた。

黒瀬に食い入るような目を向けられて、藍子の手元が狂いそうになる。手順もあやうく間違えそうになったが、なるべく彼を見ずに集中することを心がけた。

キッチンに充滿する、醤油と砂糖の甘い香り。さらにそこに梅干しがまざり、食欲をそそる匂いが広がった。

炊きたてのご飯の上に梅肉和えを盛り、かいわれ大根とポーチドエッグをトッピングする。横にオニオンサラダも置く。

藍子がトレーをひとつとした時、黒瀬がアイランドキッチンに来た。

「美味しそうだね。食欲をそそる、とてもいい匂いだ。いつもありがとう」

黒瀬の言葉に、藍子は戸惑う。彼が礼を言うとは思っていなかったで、口籠もってしまった。

藍子が呆然としていいると、彼はトレーを手にとり、かすかに口角を上げてダイニングルームを出ていった。

黒瀬の不可解な態度に、藍子はしばらく立ち尽くしていたが、ひとまずぐちゃぐちゃな思考回路を脇へ退けようと頭を振った。

今は黒瀬のことを考えるべきではない。やるべきなのは、目の前にある仕事だ。

藍子は小さな器に盛った自分の分をテーブルに置くと、急いで食べ始めた。

その後は、再び集中力を高めて仕事に取り組む。

黒瀬の望むレベルの書類が完璧にできているとは思えないが、それでも、藍子なりの精一杯で仕事を進める。彼が気にしている箇所の注釈は別に参照資料を作り、システム技術支援への要望なども、合わせて清書する。

資料作成はここで終了、として時計を確認すると、もうすぐ十六時になろうとしていた。

残り一時間でできるか不安だが、最後に残っていた経費精算の作業を始める。領収書を確認しては入力し、項目欄にチェックを入れていく。

「あと少し……！」

ひたすらキーボードを叩いた結果、十七時五分前にすべての仕事が終わった。

本当にギリギリだった。ひとまず、首の皮一枚繋がったと言えるだろう。あとはなるようにしかならない。

藍子は急いでダイニングテーブルを片付けて、続いてキッチンも綺麗に掃除する。濡れた手をタオルで拭いていた時、黒瀬が入ってきた。

時計の針は、ちょうど十七時を指していた。

「さあ、約束の時間だ。初めに、すべて仕事を終わらせたのか教えてほしい」

「はい、終わりました」

黒瀬が片眉を上げて、意味深に藍子を見つめる。心を射貫くような眼差しに恐れを成しつつ、藍子は促され席に座った。そして、山積みのファイルを彼に差し出す。

内容的にいろいろ訊ねたい箇所があったので、そこには付箋を付けて、再度彼が手直しできるよ

うにした。

黒瀬がそれらすべてを確認する間、藍子は口を閉じてじっと待つ。

黒瀬は最初こそ無表情だったが、徐々に目を見開き用紙を捲るスピードが速くなっていった。別途で用意したファイルを掴み、その中身にも目を走らせる。

「これは、俺がわざと抜いたデータだ。会社に行ったのか？ いっ!?」

「昨日の朝、こちらに何う前に寄ってコピーしてきました」

黒瀬はそれ以上何も言わない。再び資料に視線を落とす。

それから十数分後。黒瀬がため息を吐き、ファイルをテーブルに置いて腕を組んだ。

「俺の感想を言っていないかな？」

「はい」

藍子は椅子の上で居住まいを正し、レンズ越しに黒瀬の目を真つすぐに見返した。

「まず、秘書がこの仕事を三日間で終わらせるのは無理だと踏んでいた。経費の精算はともかく、俺がメインで頼んだのは、システム関連の文書作成だ。かなりわかりやすく書いてはいたものの、専門分野の知識がないとわからない言葉も多かったはず。にもかかわらず、藍子は俺の手を煩わせずにやり遂げた。……脱帽だよ」

そこで初めて、黒瀬が口元をほころばせた。さらに目を輝かせて、藍子を見つめる。

「しかも、俺の仕事がスムーズに進むように、いろいろな気を配ってくれた。仕事部屋に入るなという約束も守った。どうりで阿川部長が藍子を推すわけだ」

「推す？」

「ああ、俺の邪魔をしない、絶対に役立つ秘書だ……とね」

黒瀬の意味深な言い方で、システム研究部と総務部の部長たちが話していた内容が藍子の頭を過った。

自然と自嘲の笑みが浮かぶ。でも、それは喜ぶべきことだろう。秘書として携わる際、一番認めてもらいたいのは仕事なのだから。

藍子がホッと息を吐いた時、黒瀬が「まさしく——」と続けた。藍子に優しく笑いかける。

「部長の言うとおりであった。藍子、合格だ。君は俺の秘書として、この先もきつと役に立ってくれるだろう」

「……っ！」

認められた嬉しさで、我にもなく感極まるが、込み上げる思いを必死に抑え込む。

黒瀬は感傷的になる秘書など望んでいないだろう。彼が傍に置きたいのは、彼の邪魔にならない、彼の手足となって動く秘書だ。

藍子は目を細めて、感謝の意を示した。

「ありがとうございます」

「ああ、そうだ。これからは俺を“黒瀬くん”と呼ぶのを許す」  
からかうような口調で、黒瀬が続けた。

「はい、わかりました……黒瀬くん」

「じゃ、よろしく頼む。そうだな、俺の仕事は週明けに説明するよ。その前に――」

黒瀬が立ち上がる。藍子は自然と彼の姿を追って顎を上げ、近寄ってきた彼を見上げた。

「藍子は俺の専門を知ってる？」

「……はい？」

「俺の専門は、ハッキングだ。だから、鍵を掛けられるのは好きじゃない。……いや、違う。そうされればされるほど、俺の血が騒いで、そのセキュリティを開けたくなる」

出し抜けに、黒瀬が藍子に手を伸ばす。

「えっ？ ああ……」

黒瀬は藍子の伊達眼鏡のテンプルに触れた。そしていとも簡単に取り去ってしまう。心を隠す仮面を奪われて、藍子の気持ちいが不安定に揺れた。

それに気付いたのか、黒瀬が探るような目をする。彼は取り上げた眼鏡で藍子の顎に触れ、顔を上げると促した。

黒瀬が藍子に覆いかぶさってくる。まるで捕食動物に射竦められた小動物みたいに、身動きできない。

黒瀬の顔が近づき、吐息で素肌を優しく撫でられる。藍子の心臓が早鐘を打ち、息遣いが浅くなつた。

「俺の前で伊達眼鏡はかけないで。……いいね？」

声が出ず、頷き返すこともできない。

藍子は高鳴る鼓動に翻弄され、唇をかすかに開いて息を吸い込んだ。黒瀬の目線が唇に落ちたその直後、藍子は彼に口づけられていた。

「ん……っ、んう！」

藍子は目を見開き、椅子の上で軀を硬直させる。でも黒瀬の唇は離れない。それどころか、藍子を宥めるように動き、濡れた舌先で唇を舐め始めた。張り詰めた軀の芯が蕩け、とうの昔に捨てたはずの熱が下腹部の深奥で燦り始める。

軀を震わせながら、藍子は黒瀬のキスに酔いしれ、知らないうちに目を閉じていた。

## 第二章

数日前の出来事を思い返せば思い返すほど、藍子の顔が真っ赤になる。どうしてされるがままに唇を許してしまったのだろう。

約十年ぶりに恰好いい男性にキスされて、心が揺らいでしまったのはわかる。

でもまさか、黒瀬が舌を口腔に差し入れてきても、拒まずに受け入れてしまうなんて！

あのあと、背中に手を置いた黒瀬に玄関へ促された記憶はある。しかし、彼と何を話したのか、どうやって家に帰ったのかは覚えていない。

藍子の脳裏を埋め尽くしたのは、黒瀬の口づけばかり。

男性とは距離を置いて、仕事に生きると決めていたのに……

「藍子、こっちがPCルームだ」

黒瀬に言われて、我に返る。

週が明け本格的に仕事が始まったというのに、何をぼんやりしているのだろう。

秘書として認められたからこそ、黒瀬は藍子を個人的な仕事部屋へ案内してくれている。それを決して忘れてはいけない。

「はい」

藍子は、そっと黒瀬に歩み寄った。

黒瀬は先日のキスなど忘れてしまったかのように、平然としている。

海外生活の長い黒瀬にとっては、あれはただの挨拶であって、特別でも何でもないのかもしれない。

本来ならホッとしてもいいはずなのに、藍子の胸の奥に針で刺されたような痛みが走った。

「……っ!？」

「藍子？」

「す、すみません！」

とにかく、黒瀬が再び何かをしたとしても、軽く受け流そう。そうしなければ、彼の傍で仕事などできない。

心の中で自分を戒めて、藍子はドアを支える黒瀬の前を通って部屋に入った。そこで、足がびたりと止まる。

部屋の壁際には大きなデスクがあり、その上に大きなモニターが三台もあった。キーボードやマウス、マイク、乱雑に積み重ねられた資料も目に飛び込んでくる。窓の反対側の壁には巨大な書棚があり、たくさんの本が並んでいた。

「家にいる時は、ほとんどこの部屋で過ごしてるかな。聞いてると思うけど、うちの会社はソフトウェア技術者の育成プロジェクトに協力してる。そのプロジェクトリーダーが俺だ。今はその関係で、大学院生向けのプログラミングに追われてる」

藍子は情報を頭に叩き込み、黒瀬を仰ぎ見た。

「それは八月中旬に仕上げないとダメなんですか？」

「いや、締め切りはまだ先だけど、会社に行けば挨拶回りや、他にも煩わしい会議があるだろう？ せっかく早めに帰国したんだ。やるべき仕事があるなら、先に家で集中して取り組みたいと思ってる。他にも、システム開発室が取り組んでる別案件のチェックもいくつか行ってる。藍子が阿川部長から預かったあの封筒はそっち関係だ。途中の作業に携わってないが、最終チェックは必ず俺がするから」

その説明で、何故黒瀬があれば仕事に追われていたのかようやく納得がいった。と同時に、藍子への急な命令の理由もわかる。彼は本当に忙しく、傍で雑用をする秘書が必要だったのだ。

でも、どうして黒瀬がプログラムの最終チェックをするのだろうか。

「あの……質問してもいいですか？」

「何？」

「どうしてプログラムの最終チェックを黒瀬くんが？」

「ああ、実は日本に戻ると決まった頃から、俺は上にいろいろ提案しててね。これはひと握りの上層部しか知らないが——」

黒瀬が藍子に近寄り、そつと背に手を置いてきた。ワンピースの薄い生地から伝わる、彼の温もり。そこが発火しそうなほど熱い。

早鐘を打つ心音と不可解な昂りのせいで足の力が抜けそうになる藍子を、黒瀬がデスクへと導

いた。

黒瀬は藍子に触れた手を離さずに、モニターの電源を入れる。

「これは、納期直前の貨物追跡システム。少し甘いから、俺はセキュリティ面での追加指示を出すつもりだ。……とはいえ、ほとんど完成していると言っている。これをライバル社が何らかのルートを使って手に入れたらどうなる？」

「取引先の信用を落としてしまいます」

「そのとおり。うちの会社は、納品前のデータをライバル社に盗まれることなどあり得ないと高を括って。だが、そういう気持ちの緩さがいつか大変な事態を招くんだ。だから俺は最終チェックと称して、データにちよつとしたセキュリティをかけている。この件を知っているのは、会社でも本当に少数の人と……そして藍子だけだよ」

黒瀬の発言に、藍子は大きく息を呑んだ。

上の者しか知り得ない大事な情報を、一介の秘書に話してもいいのか。

藍子がまじまじと黒瀬を見ると、彼は藍子に流し目を向けた。

「俺のために働いてくれるんだらう？ 先週、俺は藍子の仕事に対する責任と意気込みを充分に感じた。俺はそれに応えたいと思った。……これで、もう俺の傍から逃げられないよ」

「望むところです」

この先にあるのは、きつと充実した秘書生活だ。それこそ藍子が望むべき未来だと信じて力強く頷く。だがそんな藍子を見て、黒瀬が気怠げに肩を落とした。